

「水曜サロン with 赤堀会長」第4期 第1回（通算46回）

デジタルで進化する環境による教育

1. 内容

①日本型学校教育の課題（一斉授業は150年前の最先端テクノロジーの輸入）

②今後の方向性

個別最適な学びの実践事例

教える教育から環境を整える教育へ

ICTの進歩と普及で可能性は飛躍的に拡大

同期型と非同期型×対面と遠隔

授業の改革から学校生活全体の改革へ

子ども観の転換と授業のパラダイムシフト

2. 所感

今回の臨時休校で、指示や発信、授業がないと学ばないことがよくわかったとのことでした。このような中、令和の学校教育の目指すところは、正解主義と同調圧力からの脱却、そして自立した学習者が育つ学校、であると。まずは、一斉授業の歴史から共有いただきました。それは明治の学制の時、アメリカからの輸入であり、当時の最先端テクノロジーだった。そして、正解主義と同調圧力は、150年前にその一斉授業に組み込まれていたということです。その後、100年前に世界は、これだけではうまくいかないということに気づき、ドルトンスクールや日本でも独自学習など個別最適な学びに取り組み始めていた、個別最適な学びは新しいものではない、新しいことはICTの進歩と普及と強調されていました。

山形での実践事例、単元指導案を子どもに渡す単元内自由度学習のご紹介をいただきました。適切な環境さえあれば、子どもは自ら進んで環境に関わって学んでいく、その中で、子どもたちが時間を刻み、先生は、幼児教育のように空間（コーナーや道具）を創る役割である。大切なことは、子どもたちは有能な学び手であるということを感じる。そして、授業の全てを変えるということではなく、先生のレパートリーに加えてほしいとの事です。コミュニケーションの変革については、同期・非同期×対面・遠隔の4つを上手に使い分ける。これらの改革は2割でいい。教えるときは教える、質疑の際に強調されていました。

アナログだと膨大な紙の資料の準備など大変だが、一人一台端末が役に立つことになる。その環境の中で、子ども達は、先生の知識、経験、技術を超えて、個人でそして子ども同士で学んでいける。

我々は、GIGA端末の使い方を難しく考えていたのかもしれないです。視界がすっきりしました。 那
須先生、本日はありがとうございました。

以上